

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

時三十三分であつた。御宅から御電話があつたのがそれから十四五分後であつたと思ふが、餘りに急なことでもうも私には信ぜられなかつた。それで奥様にはお急ぎのところ随分御迷惑であつたと思ふが何度となく繰返し御伺ひしたのであるが、それでも私には半信半疑であつた。兎に角御宅へと思つて丁度面會日で集つてゐた學生諸君を置き放しにして家を飛出したが、先生の御宅に伺つても逝かれた先生の温顔を拜するまでは信ぜられなかつた程である。

先生のお亡くなりになつたのはそれ程急なことであつた。もつとも近年健康を害されてをり、殊にこの一兩年の冬は先生の喘息にお苦しいやうであつたが、私どもがお訪ねすると會つて下さつた上に細々といろ／＼の注意を與へて下さる先生であつた。「炭がないのでね」といはれながら火の氣のない玄關で、弟子の誰彼のことを心配して話される先生の御親切に對しては何とも言葉がなかつた。「慈父」といふ言葉は先生に對しては形容詞ではなく、本當に文字通り先生は慈父

山本先生を憶ふ

蜷 川 虎 三

一

先生がお亡くなりになつたのは五月十三日午後の八

であつた。私どもは心から「親爺」と思ひ「親爺」と呼んでゐたのである。だから寒い間は先生に御迷惑をおかけしまいと思ひ御遠慮してゐたのが、取返しが出来ないことになつてしまつた。

そんなことで、御宅に駆附けると「先生はそんなにお悪かつたのですか」とつい不平らしい言葉も出てしまつたのである。ところが、先生が特に氣持が悪いといはれたのは二三日來のことで、その間でも人に頼まれて紹介状などを無理をして書いてをられた程で、御家族の方々もかうも急に亡くなられるとは思はれなかつたとお話であつた。しかし、悔んでも詮ないことで、先生が靜かに安らげく六十八年の御生涯を終へられたことに對し心からなる禱を捧げ先生の御冥福を祈りたい。先生に親しく教を受け導いて頂いた弟子の道はたゞ一筋に先生の御遺志を體し、眞に日本人として盡忠報國の赤誠に燃え學問道に精進することではなればならぬ。

二

先生は古武士の如き烈々たる氣魄の百萬人と雖も吾往かんといふ氣性の方であつた。従つて胸に一物あるやうな人間には相當煙たい存在であつたに違ひない。がしかし先生は決して人を責めたり咎めたりされることは全くなかつた。優しい慈父の御性格は恐らく先生の天性のものであらうが同時に青年時代における基督教的教養に培はれたところが多かつたこと、思はれる。先生にとつて基督教はまさに教養であり、妙な臭味は全然なかつた。従つて先生は徒らに説くのではなく實踐躬行自ら信念を以て教育に當たられたのである。私の如きは十八年餘り先生の御指導の下に勉強して來たのであるが、この間一度たりとも嫌な顔をされた先生を見たことがない。もちろん怒られるやうなことは全然なかつた。實に優しい先生で、私ども弟子は思ふ存分に我儘をして先生に御迷惑をおかけしたと今になつて汗顔恐縮に堪えないが、先生は我儘な弟子を愛し且つ強く信ぜられた。この限りなき先生の愛と信とに對し私ども常に反省自重し先生の御教訓に背か

さらんことを心に誓つたものである。恐らく全ての弟子の心がこの點においては一つであらうと私は信ずる。

先生の御健康が悪くなられたのは昭和四年頃からであるが、先生の責任感の強いために無理をされた結果である。丁度私が巴里滞在中先生は二度目の外遊で來られたが、その時は既に北米中米南米と廻られた後で相當疲れてをられ喘息の咳が烈しかったが一日も休養をとられなかつた。而も私が船で歸られれば御身體にもいゝからと随分おすゝめしたのであるが、講義に間に合はぬといつて頑としてきかれサベリヤで歸られたがこれが悪かつたのである。後で先生は笑ひながら「結局君のいふ通りになつた、しかし自分の病氣ぐらひで勝手なことは出来ない」といはれ、弟子の氣持を察しながらも御自身の責任について斷乎たる態度を示されたのである。私はたゞ黙つて涙をのんだ。先生は昭和十六年の日記帳の扉に老骨而も病弱で國家のためになす所なきを恥づるといふやうな意味のことを書いて

てをられたといふが、先生のお氣持はお察し出来る。日本のために、東亞のために、先生の御長命を願ひたかつた。

三

植民政策の研究は先生生涯の御仕事であつたが、水産經濟の研究についても先生は熱意を傾倒されてゐた。大正二年に出版された「水産經濟」はわが國における水産經濟研究の礎石を成したものである。資料は整はず學問的體系のない水産經濟をあれまでに組織づけられる先生の御苦心は想像以上のものであつたと思はれる。故人になられた伊谷以知二郎先生は水産畑で當時の山本先生に協力された先覺者であるが、「山本さんは熱心でしたよ」といつも私に話してをられた。先人の苦心察すべしである。

かうした先生の御努力の結果、水産經濟の研究も今日では餘程進み水産業に關する世間の認識も改められるやうになつた。曾て「願みられぬ水産業」と先生が嘆ぜられた水産も南進日本の先驅をなし東亞共榮圈の確

立下に大なる役割を演じようとしてゐる今日、先生がこの世を去られたことは惜みても餘りあることである。しかし先生が前人未踏の學問分野を開拓された業績とその貢獻とは永遠のものであり、而もこれを成すに當り、先生が飽くまでも學者としての志操を堅持され、質實謙抑なる生涯を一貫せられたことは世の師表として、眞に世の師表として仰がるべきである。